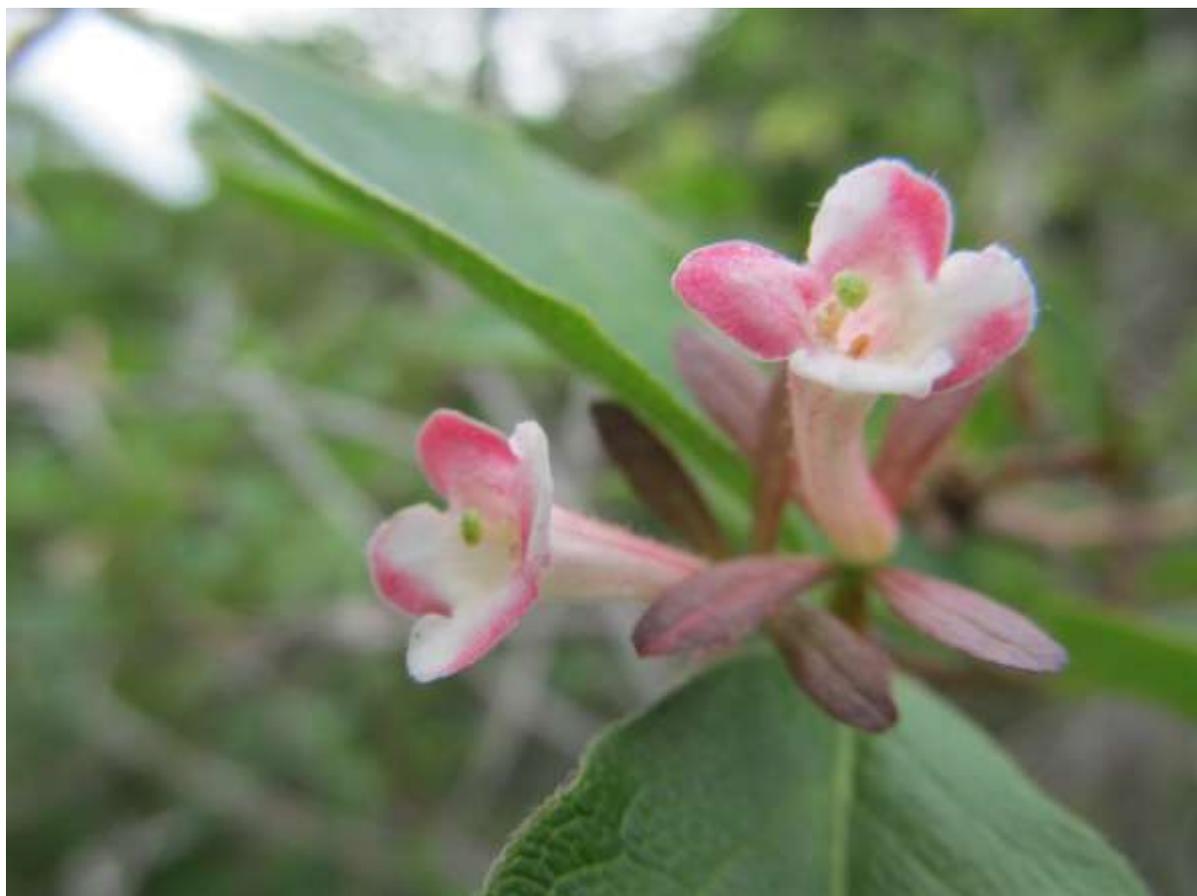


特定非営利活動法人

埼玉県絶滅危惧植物種調査団ニュース



イワツクバネウツギ *Zabelia integrifolia*

も く じ

総会記念講演会要旨	P. 2
活 動 レ ポ ー ト	
総会報告	P. 3
第1回観察会	P. 4
第2回観察会	P. 5
第3回観察会	P. 6
愛川標本の整理を終えて	P. 7
あとがき	P. 8

第7号 2014年3月31日

荒川河川敷の希少植物と外来植物に対する火入れの影響

立正大学地球環境科学部 米林 伸

荒川大麻生公園の高水敷にはイヌハギ、カワラナデシコ、ハタザオ、カワラサイコ、カワラヨモギなどの希少植物が生育しているが、ハリエンジュやニワウルシの拡大による樹林化と草地の減少が問題となっている。現在樹林化の抑制と草地の維持のために火入れが行われている。

(1) 荒川大麻生公園における火入れ履歴

荒川大麻生公園では1989年から2004年までの期間に毎年火入れが行われており、2006年から2013年までの期間にも7回の火入れが実施された。

調査の結果、ハリエンジュ林は燃え残ることが多く、火入れによる駆除は期待できないものの、樹林化やクズの繁茂を抑制する効果があり、希少種が生育する河畔草地の維持には有効なことが示唆された。

(2) 火入れによる希少植物の保全

①イヌハギ（希少種）とメドハギ（普通種）の比較

イヌハギとメドハギの種子は休眠性をもつが、イヌハギの方がより休眠性が強いことや、発芽可能温度域の下限が高いことが実験から得られた。また、両種とも洪水等の攪乱の際に種皮が傷つけば大部分の種子が発芽すること、火入れ等による温度上昇によっても休眠が解除されること等の結果を得た。イヌハギはメドハギと比べて休眠種子の割合が大きく、温度が高くないと発芽しないことから、攪乱によって形成される裸地への依存が強いと考えられた。また、火入れがイヌハギの繁殖機会を増加させることが示唆された。

②カワラナデシコ

カワラナデシコは永続的埋土種子集団を形成せず、毎年の繁殖体の形成が個体群維持に不可欠である。カワラナデシコは冬季にロゼット葉を生じ、地表の光環境の良い立地では効率よく光合成をする。したがって、火入れによって他種の繁茂が抑制され、光環境が良くなることはカワラナデシコに有利に働く。また、火入れは種子を食害するゾウムシの数を減らすため、種子繁殖の効率を改善する効果があることが示唆された。

③火入れによる草地性希少種の保全

イヌハギとメドハギの種子発芽時期は4月であり、開花時期は9月下旬であった。また、カワラナデシコは8月下旬から9月中旬に開花し、種子は11月上旬に発芽した。冬季に火入れを行った場合、競争種の排除と休眠種子の発芽や種子食害の軽減等に有効であるが、カワラナデシコのロゼットや実生には影響が大きいと考えられた。

(3) 火入れによる外来樹木の抑制

ニワウルシに対する伐採や火入れの影響を調べたところ、ニワウルシは伐採・火入れ後に、再生シュート数が約10倍になった。また、切り株からの萌芽や水平根からの根萌芽は、実生に比べ成長量が大きかった。これらのことから、冬季の伐採や火入れによる攪乱は、ニワウルシ林分を衰退させる効果はなく、新たな実生の定着や株からの萌芽、根萌芽の創出を促進し、分布拡大をもたらすことが明らかになった。(記録:平誠)

活 動 レ ポ ー ト

【総 会】

日 時：平成 25 年 6 月 2 日（日）10:30～12:00

場 所：県立自然の博物館 講堂

出席者数：会員 49 名中 39 名（内書面による出席 11 名）

当日は、平成 24 年度事業報告、決算報告、平成 25 年度事業計画、予算案、などが審議されました。

（講演会）「荒川河川敷の希少植物と外来植物に対する火入れの影響」と題して立正大学地球環境科学部米林伸教授より講演がありました。（講演要旨 P.2）

総会に先立ち理事会が開催されました。

日 時：平成 25 年 6 月 2 日（日）

場 所：県立自然の博物館 講堂

出席者数：理事 11 名中 9 名（内書面による出席 2 名）

平成 24 年度事業報告、決算報告、平成 25 年度事業計画、予算案などが審議されました。

【調査委員会議兼調査員会議】

日 時：平成 25 年 6 月 2 日（日）13:00～15:00

場 所：県立自然の博物館 講堂

出席者数：会員 30 名

- 1 再改定「埼玉県レッドデータブック 2011 植物編」の報告
- 2 平成 24 年度会計報告、平成 25 年度予算案
- 3 平成 25 年度に行うべき業務の打ち合わせを行う。

調査する希少野生植物種の種類と調査報告書の記入について説明がありました。

【懇親会】

前号で紹介されたように、前代表理事の高橋重男氏が「第 14 回さいたま環境賞」を受賞されました。それを記念し総会終了後、有志で先生のご自宅近くの「かんぽの宿」にてお祝いの会を持ちました。

当日は先生を含め 14 名と少人数の参加者でしたが、一人一人と昔話に花が咲き、充実した時間を過ごすことができました。

先生は体調のことなどもあり以前のようなハードな調査は無理なため、今年度で後進に道をお譲りになるとのこと、しかしいつまでもお元気で、われわれ後輩のご指導をお願いしたいと思えます。



【第1回 春の野外観察会】

日 時：平成 25 年 5 月 17 日（金）10:00～15:00

場 所：寄居町円良田湖方面

参加人数：15 名（指導者：高橋重男理事）

天 気：晴れ

活動内容：寄居町末野から円良田湖への植物観察

5月17日、寄居町末野の簡保センター入り口集合し、円良田湖方面に向かって歩をすすめた。円良田湖から流れ出ている逆さ川に来ると戻り橋由来記が立っている。修行中の西行が秩父に行く為に、この端まで来るとショイコを背負った子供に出会った。「小僧どこへ行く」と問うと「冬ぼきの夏枯れ草を刈りに行く」と答えた。また川の縁の民家で機を織っている娘に「その絹売るか」と言うのと「ウルカとは川の瀬に住む鮎の腸わた」と答えた。西行には禅問答のような子供達の言うことが分からず、自分の浅学を恥じて引き返してしまったという言い伝えが書いてある。

橋の近くでアイノコセイヨウタンポポを見付け、石垣のムラサキカタバミの葉の斑点を説明する。川の上にサクランボの枝が伸びて真っ赤な実を一っぱいつけている。川にはクレソンの群落やショカッサイの紫の花が咲いている。坂の途中の右側の崖からウツギの花が満開で垂れ下がっている。円良田湖に通じる舗装道路に出ると山が近づいてきた。麓にはナワシロイチゴやクサイチゴの熟した果実が現れ、皆さんが夢中になって取り始めた。やがてコゴメウツギ、ツクバネウツギ、ムラサキシキブ、テリハノイバラ、ヤマツツジ、リョウブ、エンコウカエデが出て来た。道端のフタリシズカ、ベニシダ、オクマワラビなどを見たら円良田湖の堤の石段を一步一步登る。斜面はほぼススキの群落が優占し、クララ、コウゾリナ、ノアザミ、コマツナギなどが混生している。湖面を見乍ら桜並木を歩くとオクモミジハグマ、ヤマユリ、ナルコユリ、ゼンマイ、ナツトウダイ、マムシグサ、ホソバノテンナンショウ（マムシグサ）などが見える。



湖の東端の五百羅漢登山口まで来ると、切り通しの斜面は2～3mの大里ロームでその基盤近くに玉石が埋まっている。寄居町史地学編によると、約30万年前は荒川が波久礼の山を越えて円良田へ流れ込んでいた証拠だそうである。植物では裏日本や秩父地方に特有のタヌキランが逆さ川でも見られる理由がここにあるものと思う。やがて湖畔で昼食をとり、その後は湖を一周して帰途についた。

（文責：高橋）

第2回 秋の野外観察会】

日 時：平成 25 年 10 月 18 日（金）10:00～15:00

場 所：寄居町風布

参加者：22 名（指導者：高橋重男理事）

天気：晴れ

活動内容：寄居町風布付近の植物観察会

寄居町風布の旧分教場前の駐車場に集合し、これからミカン畑を縫うように登って、葉原峠下の浦高 100 年の森に向かい観察会を開始した。

風布地区は四方が山に囲まれた盆地で、駐車場のある低部よりも斜面の中腹の方が暖かいという気温の逆転現象がある。温州ミカンの栽培が可能な地帯は、標高 230m から 270m の間で冬季寄居町の市街地より 2℃も高いという記録がある。私の長年の調査では、この暖かい地帯を中心にウラジロ、コシダ、イワヘゴ、ムギランなどが見られ、かつてはコモチシダなど暖地系植物が自生していた。



ミカン畑の間を登るとシュウメイギク、ヤクシソウ、シロヨメナなどの花が咲き、ピラカンサの赤熟した実が道端に柵を作って並んでいる。ミカン祭りが今月末に予定されているとかで、黄味を帯びた果実が緑の株の先に顔を出している。1 時間近く歩くと夏緑樹林が出て来た。コナラやヤマザクラ、エゴノキ、リョウブなどで林縁にはヌルデも見える。道は想像以上に幅が広く轍の跡も残っている。アブラススキ、ノガリヤス、アキノタムラソウ、ヒキオコシ、アキノキリンソウに加え、ヤブレガサやオクモミジハグマなど低地帯に多い草本も出て来た。

さらに 1 時間ほど歩くと視野が急に明るくなり、浦和一女の麗風会の森に入る。彼方に見える道路の上が浦高の森だ。この森の中にはトチノキ、ヤマザクラ、イタヤカエデに楷の木が植林され、小屋の裏手には 20 年前寄居町史を作る時の調査で発見したサイハイランが健在であっ

たのでホッと安心した。

食後は長瀬町風布に赴き、今年度の重点調査対象であるヒイラギソウの確認に向かう。小さな流れの縁に数株を見付け、標本作成の為枝先をとって帰途に着いた。

（文責：高橋）



【第3回 野外観察会】

日時：平成26年3月8日（日）

場所：所沢市・菩提樹池周辺

参加者：23名（指導者：山下 裕理事）

天気：晴れ

活動内容：シダ植物の観察。

当日9時45分 里山民家に集合。昨年のコケの観察に引き続き、今回はシダを観察のテーマとして実施しました。ここは、狭山丘陵の南側、都立野山北・六道山公園の一角で、岸たんぼと呼ばれているところです。すぐ北側が埼玉県の入間市、所沢市に隣接しています。都心近くですが、珍しく自然が残っています。今年は、3週間前に降った雪が、まだ谷戸の奥に残っていました。林の中には、ヤマウグイスカグラのつぼみがピンク色に色づいていました。シダについては、ヤマイタチシダ、ベニシダ、ヤブソテツ、ノキシノブ、イヌワラビなどが観察できました。



午後は、参加者の中で、ほかの場所で採集したシダの標本を使って、実際に「種」の同定を行いました。今度出版される「植物検索ハンドブック」のシダ検索表（抜粋）を参考にしながら、シダの各部分の名称や分類のポイントなどを説明しました。

今の時期、まだ林の中の植物は、葉や花を展開する前ですが、その中で、目につく常緑性のシダは、種類が少ないので、しっかりと確認することができます。



（追伸）

ここ里山民家は、家の中で昼食とることができます。今回はスタッフの皆様から、漬物の差し入れをいただきました。それから、ここで観察できるシダ植物の「本」をいただきました。タイトルは、宮野入谷戸「シダ」ガイドブックです。（文責：山下）

— 愛川標本の整理 を終えて —

矢島 民夫

NPOの創始者であり前身の「さいたま植物資料研究会」の会長を務められていた愛川敬武先生が亡くなられ、早いもので4年がたちました。「さいたま植物資料研究会」の会誌である「さいたま植物通信」は1999年4月より年4回10年間発行され40号を数えました。

「さいたま植物通信」第1巻合本の“発刊にあたって”に見られるように、“標本があるものだけを記載するという原則で編集する”ということがありました。その結果、愛川先生宅にはご自分で採集された標本や多くの会員から標本が届けられていました。しかし、その標本の多くは（会誌の中では県立自然の博物館に納めたとある）未処理の状態に残されていました。

愛川先生が亡くなられ、残された標本は矢島が預かることになりました。その後、県立自然の博物館と相談の結果、状態の良いものを博物館の形式にのっとり台紙に張り、データを添えて納めることになりました。2011年度1214点、2012年度は残り1090点の標本を作製し合計2304点を愛川標本として納めることができました。

その内訳を報告すると愛川敬武（1302点）、植田雅浩（1点）、太田和夫（93点）、太田泰弘（20点）、平 誠（4点）、四分一平内（6点）、樽見一忠（1点）、岩田豊太郎（496点）、ト沢美久（1点）、森真知子（2点）、森静江（1点）、田悟敏弘（1点）、長谷部操（1点）、菊池久雄（16点）、宇津木達（100点）、加藤亮明（37点）、市川嘉一（20点）、田中溢子（34点）、福島正男（24点）、山岸一郎（8点）、島崎敏明（3点）、遠藤夏緒（1点）、支倉千賀子（2点）、三上忠仁（3点）、矢島民夫（2点）、高橋重男（1点）、石渡孝行（24点）、小峯昇（3点）、牧野彰吾（12点）、安田啓祐他（2点）、北田義明（2点）、廣澤信男（3点）、長須房次郎（40点）、清水保典（4点）、畠山ミヨ子（2点）、渡辺和章（1点）、塚原節子（30点）、能見三郎（1点）となります。

標本の内容を見ると、シダ植物245点、裸子植物7点、被子植物2051点、その他1点となります。特にラン科29点の中にはトラキチラン（ト沢）、コアツモリソウ（平）、ハクウンラン（田中）、アケボノシュスラン（遠藤）、ミスズラン（三上）、ヒトツボクロ（三上・牧野）、ユウシュンラン（平）などの県内で初めての標本や貴重な標本が多数含まれています。

「さいたま植物通信」40号が発行されてから、4年が経ってしまいました。何とか再発行ができるようにと考えています。それにはみなさんの協力が必要で、調査・採集・標本の整理・報告と手間のかかる作業を地道にこなすこととなります。しかし、これからのNPO活動にとって必要不可欠な部分とも思われます。

現在いくつかの出版物が計画されていますが、そのもっとも重要なものが「埼玉県植物誌」の改訂であると思われます。1998年版が出版されてから、17年目となります。この間に2回の「レッドデータブック（植物編）」の改訂があり、多くの資料が集められてきました。これらを生かすためにも、さらに充実した資料収集に努め「埼玉県植物誌」の改訂に向けて進みたいと思います。

【あ と が き】

念願の「仮題・埼玉県産植物検索表」が「フィールドで使える 図説植物検索ハンドブック」という長い名前の本になり、「さきたま出版会」より出版されることになりました。

構想から14年？紆余屈折を繰り返し、先に「埼玉県植物ハンドブック」が出版され、これで終わってしまうのかと、心配される時期もありました。

今年度は原稿が完成し「公益法人 サイサン環境保全基金」からの助成を受け、後のない状態で8月から2月までの6か月、校正や図の差し替えなどに追われ、やっと出版できたというのがみんなの正直な感想でしょう。しかし、冷静に考えると、これは「埼玉県植物誌」の改訂版を作るための一歩であると考え、先の長い話でもあります。

このようなことから、またまた今年も「さいたま植物通信」の発行ができませんでした。それにつけても10年間も続けた愛川先生の偉大さが理解できます。第1号の「はじめに」にあるように“「はじめに植物ありき」で行きましょう。”は素晴らしいお言葉に聞こえてきます。

<表紙の写真> イワツクバネウツギ

一昨年、調査で小さな石灰岩地に上ったとき、偶然ピンクの花が目立つウツギを見つけた。よく調べてみると「イワツクバネウツギ」であった。県内では武甲山など限られた石灰岩地で生育が報告されている。県内の石灰岩地にはかなりの回数調査に入ったが、今回初めて見ることができた。翌年再調査にゆくと、今度はちょうど開花時期で表紙の写真を撮ることができた。

埼玉県絶滅危惧植物種調査団ニュース NO.7

2014年3月31日発行

編集・発行 NPO法人 埼玉県絶滅危惧植物種調査団

発行責任者 矢島民夫

事務局 〒350-1124 埼玉県川越市新宿町 1-3-16

TEL 049-241-5857

発行所 〒350-1124 埼玉県川越市新宿町 1-3-16

TEL 049-241-5857